

1. 起倒流における思想の展開について —寺田正浄の伝書群を中心に—

講道館 畠山 洋平

1. On the development of thought in *Kito-ryu*: Focusing on Masakiyo TERADA's work

Youhei HATAKEYAMA (Kodokan Judo Institute)

Abstract

The purpose of this research is to analyze the work of Masakiyo TERADA and to clarify how thought were developed in *Kito-ryu*. Characteristic thought seen in Terada's works are as follows

1. He emphasized winning himself rather than winning others.
2. Therefore, with Terada's work about *Kito-ryu*, the shape was not a means to win against others, but was positioned as a means of training for winning oneself.
3. Terada claimed that Jiu - Jitsu is the foundation of all the arts and also useful in everyday life.

The above Terada's argument can be said to be the pioneer of Jigoro KANO's argument and it is necessary to reconsider the view of Jujutsu and judo so far.

1. はじめに

戦国時代の終焉により、それまで総合的なものとして行われていた武術は剣術や柔術、槍術などに分化し、それぞれの武術の中でも多くの流派が成立した。素手を主体とする柔術にもいくつかの流派が成立したが、その中の一つに起倒流があげられる。明治15年（1882）に講道館柔道を創始した嘉納治五郎が自ら学び多大な影響を受けた柔術であり、そのことから、知名度が高い流派の一つである。その成立過程は未だ詳らかになっていないが、道統を継いだ吉村扶寿、堀田頼庸等^{よりつね}のころには『本体』『天之巻』『地之巻』『人之巻』『性鏡』の五巻からなる基本伝書^{すけなが}¹を修行の段階に応じて伝授する体系が確立されたようである。その後、代を重ね流儀が広まるにつれて、基本伝書の伝授とあわせて、内容に様々な解釈等を加えたものや、基本伝書を補完する形で新たな伝書類も著された。

本研究はこのような伝書の中から寺田正浄^{まさきよ}の著した伝書に注目し、基本伝書には見られない彼の思想を明らかにし、基本伝書成立以降の起倒流の思想がどのように展開されたかのか、その一端を探ろうとするものである。

起倒流に関する研究はこれまで老松信一氏^{*2}、藤堂良明氏^{*3}、原丈二氏^{*4}、中嶋哲也氏^{*5}、桐生習作氏^{*6}等によって行われており、研究成果はかなり蓄積されてきているが、それぞれの伝承者に焦点をあてた研究は十分とは言えないのが現状である^{*7}。

1) 寺田正浄について

まず今回、取り上げる史料の筆者である寺田正浄について少し触れておきたい。寺田正浄は堀田頼庸の高弟であり、後に江戸で起倒流を広めた瀧野遊軒と同門とされている。また、故実研究を行った形跡も見られ、起倒流の成立に深い関係があると思われる起倒流乱についての研究も行っていただようである^{*8}。彼の著作は起倒流において基本伝書以外では初期のものであり、後の起倒流修行者に影響を与えた可能性も高く、起倒流を研究する上で欠かせないものであると思われる。

2) 史料について

本論では寺田正浄の代表的な著作である『登假集』並びに『燈下問答』を取り扱う。

『登假集』は享保14年(1729)に著されたものであり、「一、武藝の始終組討に極る事」「一、柔術は士の不用といふ誤り之事」「一、古より相撲を以て組討修行之事」「一、福野七郎右衛門和ら発明之事」「一、福野より諸流分る事 附、本を取失ふ事」「起倒流組打と改ル元祖の事 附、事理修行心得[†]卷之次第の事」により構成されている。現在、筑波大学附属体芸図書館、天理大学附属天理図書館等に現存する。

『燈下問答』はある人が起倒流についての疑問をなげかけそれに対して「予」が答えるという問答形式をとった著作であり、宝暦14年(1764)4月成稿とされる^{*9}。天理大学附属天理図書館、富山県立図書館、東北大学附属図書館等に現存する。

いずれも渡辺一郎氏により月刊『武道』^{*10*11}において紹介され、『登假集』は『武道の名著』^{*12}に収められている。本論では渡辺氏が校注したテキストと原文を照らし合わせながら考察をすすめる。

2. 『登假集』『燈下問答』にみる「克己」

寺田正浄の著作においてその思想の一端がうかがえるのは下記の文である。

他ハ、人ヲ制スル処ノ手先ノ業ヲ以テ、人ニ勝事ヲ欲ス。当流ハ、人ニ勝ノ道ヲ不_レ論_ス常ニ己ヲ顧ミ、己ヲ責メ、己ニ克ツ事ヲ欲ス。本ヲ修スルト、末ヲ取ルトノ違ナリ^{*13}。

これは『燈下問答』の一節である。他の流派と「当流」すなわち起倒流との比較である。この記述によると他の武芸が手先の業を使って人に勝つことを求めているのに対して、起倒流は異なり、人に勝つ道は論ぜず、常に自身を対象とし、自分に克つことを求めているという。『燈下問答』には、別の箇所以下に以下の記述もみられる。

(他流は) 末ヲ学ンデ其業ニ一生ク、ラレ、本ニ帰スル事難_レシ及_レビ。予流ハ、本ヲ修シテ末ヲ

不_レ求^{*14}。

さらに『登假集』にも以下のような件がある。多少、長くなるが引用したい。

然ども、教る所さまぎまの取形、中身等を専らにして、人を制するの道を教ゆ。今此、我慢強く、人欲盛んの人に、人を制し、人を傷り、人を投げ、人に勝つといふ業計り教る故、事をはなれ一心に立帰り、己を知るの場所なし。是業に括られ止る故也。其上、世間の人の修行を見れば、漸く五年か三年習ひて、表裏の太刀数、取形の手数覚ぬれば、其流を得たるやうに思ひ、言葉はげしく異相になり、行跡いかつにして、心易く人に勝事のやうに思ひ居る人のみ多し。大に恥敷事也。教ゆる人にさへ稀なるは、上手也。縦勝といふ道まで出でたりとも、其上を知らず、一生業に括られて、其所に止る也^{*15}。

『燈下問答』より、さらに痛烈で詳細な批判を、柔術以外の他流も含め行っている。人に勝つための方法として技を学ぶ為に「己を知る」ことが出来ず、3～5年間、修行し、「表裏の太刀数」「取形」などの技を覚えると、言葉遣いやその行動がいかめしくなる、また人に勝つことを容易に考えたりするようになる。そのような振る舞いを「恥ずかしきこと」ととらえている。

これに対して、起倒流はその対象を他者ではなく、自らとしている。これは『燈下問答』の以下の記述からも明確である。

人に勝事を離れ、己に克つ道を能々修行工夫すべし^{*16}。

他の流派が他者へ勝つための技に止まるところを、起倒流では、人に勝つことを離れ、自分に克つことを修行しなければならないとする。

この「己に克つ」、「克己」という用語は、基本伝書では『地之巻』、「気体之事」の項に以下のように記述されている。

是則天の巻の云う所の不動智なり。有不負備、有可勝謀。聖言に克己といふもかようべきか。己に勝て躰正しき時は、千万人にも決の利ならむ^{*17}。

この記述によると克己と不動智は同様の意味を持つことになるが、この件以外に「克己」という用語は基本伝書上に見られない。さらに、ここでは克己というような状態になれば、「決の利ならむ」としている。「決の利」とは何か、はっきりしないが、史料によっては「勝の利」としているものもあり、他者への勝つことを示していると思われる。つまり、「克己」はあくまでも他者に勝つための要素に過ぎない。

一方、寺田の著作において「克己」はたびたび触れられ、かつ、自己をその対象とし、その後の他者への勝とうとする気持ちは、この「克己」の状態か切り離されている。

そもそもこの「克己」という用語は『論語』において顔淵が仁について問いかける件で「顔淵問仁、子曰、克己復礼爲仁、一日克己復礼、天下歸仁焉」^{*18}と用いられてる。寺田の記述は基本伝書では「克己」のみであったものが『論語』で用いられる様に「復礼」という用語にまで言及している。

克己といふ心は、気の偏倚する所を常に制して、心氣の差別、軀の虚実を知り、機の善悪を改むる所也。復礼とは、其機を多年に制しおふせて、其氣を忘れて天理自然の道にかへる所也。唯世間の武藝は、業の詮議計り也。夫故若き人、武藝を好む人見れば、多くは人相悪敷、異相異形を好んで血氣を増し、人を下目に見て、愛和を失ふ^{*19}。

ここで言う「復礼」は気の扱いにたけ、なおかつ、その気を扱うことすら忘れて、「天理自然の道」にかえることとしている。この「天理自然の道」が具体的に何を示すかは分からないが、人同士の勝敗等を超えた境地であることは想像に難くない。

これまでの一連の記述を見ると寺田正浄にとって業に泥むことは人欲や血氣などを盛んにし、人としてあるべき姿とは異なる方向へ進んでいくと考えていることが分かる。これに対して、寺田の目指すところは自らの外側に求めるのではなく、自らの内側を対象とするものであることが分かる。ここに寺田の考える起倒流の他流と異なる特性が示唆されている。

この内面については、『登假集』に以下の様な記述も見られる。

覚えたる業を、我心を相手にして成時は、我心能く其業をしるゆへ、裏に裏生じて分る、事なし。一心闇き故、人には勝とおもへども、我心を相手にする時は、其業わからずして勝所なし。碁、将碁を独り指すに似たり。向ふの作る事も、我心に知る故也。此心に克つを、克己といふと知るべし^{*20}。

技をもって、人に勝つことが出来ても、己に克つ事が困難であるという寺田の主張であるが「人に勝つこと」よりも「己に克つこと」をより上の段階に考えていることがうかがえるであろう。

3. 「形」にみる寺田正浄の思想

前項では、他流の他者に勝とうとする「技」にこだわることから弊害が生じるという寺田の指摘を見たが、それでは、寺田の考える「技」の存在意義は何だったのだろうか。

起倒流も他の近世柔術と同様に修行方法に「形」が含まれている。同流における形は『人之巻』に著された表「体」「夢中」「力避」「水車」「水流」「曳落」「虚倒」「打碎」「谷落」「車倒」「鍛取」「鍛反」「夕立」「滝落」の十四本と裏「身碎」「車反」「水入」「柳雪」「坂落」「雪折」「岩波」の七本、合計二十一本が主なものとなる。これらは、現在、講道館柔道で「古式の形」として行われているものであるが、『人之巻』には、技法の詳細はもちろん、その意義など一切記されず、技名称が記されているのみである。これらの形について『燈下問答』では以下のような問いがなされている。

又問曰、世ノ和、捕手ト云フニハ、当身、殺シトイフ事ヲ奥義トシテ、常ニ修行ニ用ル者アリ。当流十四形ノ外ニ業有ルヲ不聞。奥義ニ至リ、其事有リヤ否ヤ^{*21}。

「和」や「捕手」などの素手術には当身等の奥義があるが、起倒流には十四形以外に技があるのかという問いである。この問いに対して「此ヲ以、十四形ノ業ヲ設テ筌蹄トス。魚ヲ得、獸ヲ得而後、何ゾ筌蹄ヲ求ンヤ」^{*22}と答えている。筌蹄とは荘子に見られる用語であり辞書によると「①物を手に入れるまでの道具で、目的を達すれば不用となるもの。目的を達するまでの手段。

方便の具。②てびき。案内。③士大夫が講話の時に持った払子の類^{*23}とある。ここでは①の意味であることは間違いのないであろう。つまり形のうち少なくとも表十四本の形は何らかの目的を達するための手段であることが分かる。

では、形はどのような目的を持って行われていたのでしょうか。

まず、以下の『登假集』における形の起源に関する件を見てみたい。

元祖正重は、幼少より武藝を好み、別而柔術組討に鍛錬し、起倒の一流を發明す。此一流を取組之趣意は前にいふ所の取形・所作を以て気を導くといへども、人を制する業ゆへ、弥人欲をはなれがたくして、其業に括られ克己に至る所及がたし。是以て、正重己に勝、人欲に勝て、我を放れ放る、道を早く得させん事を工夫し、五巻の書を編み、十四形の取形をもって心氣を顯はし、軀の直き事を教へ、静にして柔か成る所を教ゆ^{*24}。

寺田正浄の伝書によると寺田正重が起倒流の形を創出した人物ということになる。これが史実であるかは別途、検討が必要であるが、正浄の述べるところでは、正重は起倒流創始当初行っていた形は、気を扱うものでありながらも人欲や業にとらわれてしまうため、新たに十四の形をつくり、己に勝、人欲に勝つことを目的としたとされている。この記述を見るとこの十四の形は決して敵を倒すためのものではなく、その対象が自分自身になっていることがうかがえる。また、『燈下問答』にも以下のような記述がある。

亦問曰、十四形ハ克^レ己^ニノ修行ト申事、復^ル礼^ニト云フ事、如何ナル処ヲ号テ可^レ申哉。

答曰、是又、前ニ云フ如ク、十四形ハ敵ニ勝ツ業ニ非ズ。性・心・氣ノ三元ヲ顯シ、唯己ヲ知ルノ取形也。而後ニ敵ヲ知ル故ニ、不^レ勝^ト云フ事ナシ。心ニ善悪ナシ。氣ニ貴賤・賢愚・清濁・厚薄アリ。中ニモ、人欲ト云フモノ主トナリテ、心ヲ覆ヒ穢ス^{*25}。

ここでは十四の形が「克^レ己^ニノ修行」であり、「敵ニ勝ツ業ニ非ズ」と敵に勝つためのものではなく「己ヲ知ルノ取形」であることが明言されている。つまり寺田の思想においては形も敵に勝つためではなく己に対するものであることがわかる。

また、寺田は「残合」についても記述している。

「残合」とは藤堂氏によると「『形』の稽古中に請立は取形の技が利かない時は倒れない、また取形が未熟な技であれば逆に攻撃を加えるといった意味」^{*26}のことであり、現在の柔道における乱取稽古の原型であるとしている^{*27}。この乱取は特定のルールの中でお互いに自由に技をかけあう形式のことであるが、この「残合」について、『燈下問答』では

以下のように記述している。

請立ノ残ルト残ラヌト云フ事有リ。残ラヌ道有哉。

答曰、其道ヲ論ズル事、当流ノ本意ニ不^レ有。唯取形ヲスル人、請立ノ人、同氣ニ成テ、共ニ己ヲ磨ク然ドモ、折々其残ルベキ道理ヲ見テ残り、勝氣ヲ制シ、偏倚スル処ヲ顯シ、虚実ヲ知ラスル取形也。故ニ残ルモ修行也。一ツノ業ヲ直ス事、一ツノ業ヲ直スニ非ズ。一ヲ以テ、一軀ノ位ヲ本性ニ至ルノ導キ也。取形ヲ以テ争フ故ニ、人欲離レズ、血氣ノ増スヲ、丈夫ト見テ誉ソヤス故ニ、師ノ血氣ヲ請テ、人相イカツク、行跡見苦敷、他人ヲ誹リ、人ヲ嘲り、己ニ誇

ル心有り。人ノ見ル処モ恥カシキ事ニ非ズヤ。本是レ大乘ヲ知ラズ、人ニ敵スル事ヲ大ヒニ悦ブ、小乗ノ故也。(中略)己ガ人欲ニ克テ、温順ノ人徳具リ虚無ニ至テハ、何ジ請立ノ残ル事ヲ得ンヤ。唯、取形ニ勞スルユヘ、争フ気強ク、躰一ツノ取形ニモ、色々ノ仕形有ル様ニ成ル者也。是全ク、業ニ泥ムトイフモノ也^{*28}。

ここでは人に勝つことではなく己に克つことを目的とする起倒流の形においても争う気持ちがあれば人欲を離れることができず、血気盛んになりその日常での行いがあるべき姿と異なるものになり、他の流派と同じく、技にとらわれた状態になることを注意している。

寺田における起倒流の「形」はあくまで人と争うものではなく己自身に働きかける目的がその根本にあったと思われる。

4. 寺田正浄における柔術の意義

以上、寺田の著作から基本伝書に記されていない彼の思想の一端を見てきたが、これまで取り上げてきたものとは異なる寺田正浄における柔術の意義とでも言うべきものがある。これを最後に見てみたい。

下の記述は『燈火問答』の記述である。

柔術ハ士ノ用ザル術ト覚ヘタル人武士ノ歴々ニ多ク有り。其誤リヲ子孫聞傳テ用ル時ハ恥ヲ傳ユルニ同ジ。是元剣術ニモ疎キ故也。大ニ恥カ敷事也。武術ノ始終ニ理ノ極ル所ハ組討也^{*29}。

この記述と似たものが、『登假集』にもある。

和は士の用ひざる術と覚たる人、武士に有。取手杯いふ故か。是本理に闇き故なり。偕々無^レ覚束^レ恥しき事なり。前に言所の組討の道理疎き故、尤也。譬剣術を能得たり言とも、仮初の事に人を打捨切果しては、先祖の家を破却し、大切なる命を無益に捨る也^{*30}。

『登假集』の記述は「一、柔術は士の不用といふ誤り之事」と名付けられた項目の一部である。これらの記述によると、寺田にとって柔術は武術の根源であり武士のおさめるべきものでありながら、当時、柔術の評価が武士達の間で決して高いものではなかったことが想像される。また『登假集』の最初の項目「武藝の始終組討に極る事」には以下のように記されている。

神の御国の人賢く豊なる御代といへども、武を忘るゝ事なく、和を表にし裏に勇有て、静に兵器を磨くは、長久の躰るゝ所也。夫兵器品々有る事、戦場の間数によりて、弓鉄砲或は鎗長刀太刀かたなを以て戦ふ也。何れも理の極る所は、間近く取入て組討と成るもの也。その上、身の分限により、常に弓鉄砲鎗長刀等を持事なし。喩へ長道具熟し、棒鎗得たりとも、仮初の優會に用意も成るべからず。又は君前、私家、風呂、茶湯等、無^レ処無刀の場所多し。また大将たりといふとも、戦場にて追詰らるゝ節有り。又大名・高家の御身の上にも、場所悪しく家来も付ざる席にして、不意の口論杯数多有る事なり。躰術組討の道疎き故、残念至極の義ども、其数をしらず。又戦場にて甲冑を着したる者は組討なくて利を得る事有るべからず。柔術修行有て、体の虚実を能治定あらば、万藝に通ずべきものなり。故に柔術組討を万藝の本とするべし。

ここには、武士の本分であった戦場における柔術の意義から日常における有用性まで細かく主張されている。また同時に柔術が全ての芸の本であることも述べられている。しかしながら、ここで述べられている柔術の意義とは、いわゆる技術の実用性が主であり、寺田が『登假集』『燈下問答』を通して批判してきた部分でもある。そこであえて起倒流と言わず「柔術」としたのかもしれないが、この矛盾とも言える部分についての言及はとくになされていない。このような柔術の意義についての主張は基本伝書には見られない。起倒流ならびに寺田正浄が同時おかれた状況から生まれたものと推測される。

5. おわりに

以上、寺田正浄の思想を『登假集』、『燈下問答』の二著より見てきた。彼の述べるところによると他流が敵に勝つということを目的にしているのに対し、起倒流は「克己復礼」等、自らの内面を追求することを目的とし、「形」もそのための役割が課せられていた。また、これらの思想は基本伝書の文面から直接は読み取るのが困難であり、寺田の考えであった可能性は高い。起倒流が決して技術のみではなく、人としてのあり方まで追求していたことが分かる。

寺田の著書を見ることにより起倒流には寺田正浄において既に術にこだわることを批判的に捉え、技術をもって技術以外のものを追求するといった思想が存在することが確認できた。

起倒流の分布については中嶋氏が入念な調査を行っているが^{*31}、まだはっきりしない部分が多い。そのため、この寺田の思想が後世に与えた影響も明確ではない。ただ、こういった研究が広範囲にわたり、修行者間で思想的な交流が行われた可能性は決して低くはない。

例えば富山藩に伝わる『起倒流柔術記録』に記述の中に、「中西之記」として記されている内容がある。筆者は平成18年に「基本伝書成立以降における起倒流の展開に関する一考察－『起倒流柔術記録』を中心に－」、平成19年に「近世後期における起倒流の様相－天真白井流との関わりから－」と題し『起倒流柔術記録』についての発表を行ったが、そこで「中西之記」について、中西とは一刀流の中西是助であり、中西の記述によるものと推測していた。ところが、その後、「中西の記」として記されていたものが、全て、真田宝物館所蔵の「起倒流柔道五卷其外口訣」と同様のものであることが分かった。菊本氏は『起倒柔道五卷其外口訣』は『柔道兩中間答』の筆者である水野忠通が大阪町奉行在任中（1798～1806）に書き写したものではないかと推測している^{*32}。中西と水野の関係は不明だが、真田家宝物館所蔵の起倒流関係の資料が真田幸貫の旧蔵のものであり、その真田幸貫が天真白井流の白井亨の弟子であったことなどを考えると、その周辺で何らかの交流があっても不思議ではない。このように柔術だけでは辿れない人的ネットワークもあり、今後の一層の研究が期待されるが上記の様な交流を十分示唆する事実であろう。

また、寺田正浄以降の起倒流においても『柔道兩中間答』などの伝書が記され、寺田の著作が引用された上で、柔術と柔道の違いなどが言及されていることも、無視できない。

さて、この寺田の思想、端的に言えば、術そのものの体得が目的ではなく、むしろ、術は道に至るための手段であったことがうかがえる。この考えは、講道館柔道創始者である嘉納治五郎が「講道館の教えるのは道が本体であって術は附随したものであり、かつ道に入る手段」^{*33}といった思想を大枠で先取りしていたと言える。嘉納自身は明治21年（1888）に「日本文学」内に掲載された「柔術およびその起源」の中で、『起倒流燈下問答』からの引用を行っており、この文献に目を通していたことがわかる。また先行研究が指摘するとおり、嘉納が起倒流の師、飯久保恒年から受けた免許皆伝の伝書には「日本伝起倒柔道」とあること、また、嘉納自身が起倒流で「柔

道」という呼称を使っていることを言及していることから、「柔道」という名称は嘉納自身にとっては柔術修行時代からなじみのある言葉であったことが分かる^{*34}

講道館ならびに講道館柔道の歴史は、柔術との直接対決による勝利、ならびに、柔術の否定によって成り立っている部分も多い^{*35}。しかしながら、本論を見て分かる通り、起倒流では、すでに嘉納の思想を先取りするような思想を持っていたことは明らかである。このことは、柔術史ならびに柔道史を考える時に、重要な意味を持つであろう。

中嶋氏は、明治15年の講道館柔道の成立を以て、柔術と柔道とを歴史的に分断して捉える近代化史観に疑問を呈しているが^{*36}、本論の成果も同様の課題を呈するであろう。

さらに、踏み込めば、渡辺が本論で扱った史料を紹介して、かなりの年月が経つが、未だにこのことが明確にされてこなかったのは、嘉納の言説をそのまま歴史的事実と捉えることが大前提であったためだと思われる。しかしながら、嘉納治五郎の言説は鈴木康史氏^{*37}やアンドレアス・ニーハウス氏^{*38}等が指摘するように一般の人間や柔道修行者に向けて、一定のベクトルを以て語られた言説であり、当然、そこには歴史的な事実として捉えてしまっても良いものばかりではない。史料批判が十分に行われてきたかと言えば、そうとは言い切れない部分であろう。

技術を通して、人間としてより高い境地に至るといったテーゼも起倒流から嘉納治五郎へ継承されたものと思われる。そうすると、そこには東洋に古くから伝わる身体の修練により人間形成という一つの系譜が見えてくる。嘉納治五郎の柔道論も、今後、その様な文脈で論じていく必要があるのではないだろうか。

平田論治氏は嘉納治五郎の留学生教育についての論文^{*39}で「顕彰の検証」の必要性を述べている。嘉納治五郎に顕彰が必要な場合も多々あるかもしれないが、学術の分野では必要なのは「顕彰」ではなく「検証」であることはいうまでもないであろう。

注

*1 この五冊を基本伝書と呼ぶのは原、魚住氏の先行研究に拠った。

原文二・魚住孝至「起倒流が唱える『柔道』の意味」国際武道大学研究紀要18, pp211-224, 2002.

*2 老松信一「起倒流柔術について」順天堂大学体育学部紀要6, 1964.

*3 藤堂良明・小俣幸嗣「起倒流柔道について－流名、術理及びその思想」筑波大学体育科学系紀要17, pp123-131, 1994.

藤堂良明『柔道の歴史と文化』不昧堂, 2007.

*4 原文二・魚住孝至「起倒流が唱える『柔道』の意味」国際武道大学研究紀要18, pp211-224, 2002.

*5 中嶋哲也「近世における起倒流柔術の歴史的実態」早稲田大学修士論文
「直心流柔術の系譜検証--『直心流柔序』の読解を通して」武道学研究43巻1号2010.

*6 桐生習作「嘉納治五郎の「形」の普及戦略に関する研究：「起倒流の形」から「古式の形」への展開に着目して」武道学研究45巻2号, pp.119-133, 2012.

「起倒流柔術の技法に関する一考察：真田家文書を中心に」講道館科学研究会紀要第15輯, 2015.

*7 このような観点から行われている先行研究に菊本智之氏の一連の研究があげられる。氏は起倒流の中でも鈴木系に焦点をしぼり、その独自の思想について追求している。

菊本智之「松代藩史料『古松平楽翁源定信朝臣 體乃趣意を書給へる一卷』に関する一考察」(第37回日本武道学会発表)、「松代藩武芸関係史料『柔術五卷注解 全』に関する一考察」(第39回日本武道学会発表)甲乙流関係史料にみる為政者の武芸実践と政治思想に関する一考」(第49回日本武道学会発表)等

- *8 天理大学附属図書館所蔵の寺田正浄の名が記された伝書の中には起倒流のものと思われる伝書も含まれている。
- *9 渡辺一郎「武道の傳書」第20回, 月刊『武道』6月号, p.66, 1979.
- *10 渡辺一郎「武道の名著」第5回, 月刊『武道』8月号, 1975.
- *11 渡辺一郎「武道の傳書」第20回, 月刊『武道』6月号, 1979.
- *12 渡辺一郎『武道の名著』東京コピー, 1979.
- *13 『燈下問答』
- *14 『燈下問答』
- *15 『登假集』
- *16 『登假集』
- *17 『登假集』
- *18 金谷治『論語』岩波書店, p.224.2004.
- *19 『登假集』
- *20 『登假集』
- *21 『燈下問答』
- *22 『燈下問答』
- *23 新村出『広辞苑』岩波書店, p.1527, 1998.
- *24 『登假集』
- *25 『燈下問答』
- *26 藤堂良明『柔道の歴史と文化』不昧堂, p.47, 2007.
- *27 藤堂良明『柔道の歴史と文化』不昧堂, p.47, 2007.
- *28 『燈下問答』
- *29 『燈下問答』
- *30 『登假集』
- *31 中嶋哲也「近世における起倒流柔術の歴史的事実」早稲田大学修士論文, 2007.
- *32 菊本智之「『起倒柔道五卷其外口訣 全』に関する一考察」日本武道学会第40回大会発表抄録, 2007
- *33 講道館『嘉納治五郎大系』第2巻, 本の友社, p.16, 1987.
- *34 嘉納が「柔道」という名称をつけた理由については、いくつかあるが、確認できる限り、最も古い「柔道一斑ならびに其の教育上の価値」では、「柔術という言葉を用いないでことさらにただ高尚な一、二の流儀のみで用いていましたところの柔道という名称を付け」たかの理由は、①従来の柔術の悪いイメージと一緒にされるのを避けるため②先人の功労を消滅させないため「以前よりあった名称を存しておきまして」その上に講道館とつけた、としている。同講演内では「柔道は柔術の異名」とされており、後年の教えるのは術ではなく、道だからというテーゼは見られない。同講演が、講道館柔道を世間に対してアピールするための大事な講演と位置づけるのであれば、後世、最も重要な理由とされる「教えるのが術ではなく道」

というテーゼが出てこないのは不自然であろう。後述の史料批判を含めた検討が必要な部分と思われる。

*35 筆者はこのような考え方に対して若干の疑問を呈している。

畠山洋平「嘉納治五郎師範 実践の軌跡－講道館柔道の創始と普及活動について－」『実践柔道論』メディアパル, pp7-10, 2017.

*36 中嶋哲也「幕末における柔術試合の台頭とその実態:天神真楊流・磯道場『他流試合姓名控』を手がかりに」講道館柔道科学研究会紀要, 第16輯, 2017.

*37 鈴木康史「経験・言語・宣伝--思想史からの嘉納治五郎」体育思想研究, 1, 1997.

*38 アンドレアス・ニーハウス「伝記における身体－嘉納治五郎の生涯の解説」体育史研究22号, 2005.

*39 平田論治「嘉納治五郎の留学生教育を再考する－近代日中関係史のなかの教育・他者・逆説－」筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻『教育学論集』第9集, 2013